

おでかけ学童 —境界をほどく—

建築計画研究室 岩永美春
指導教員 木多彩子

拠点型学童 第二の家 カームダウン室
地域連携 居場所選択 GPS 自転車

1. はじまり

私は学童で4年間アルバイトをしており、児童が長時間過ごす姿を見て、疑問を抱いた。子どもにとって、より良い放課後・長期休みってなんだろう。

2. 背景

2.1 学童の現状

小学生人口は減少しているが、共働き世帯の増加に伴って学童の児童数は年々増加している。また、学童は小学校に比べて年間滞在時間は約400時間多い(図1)。

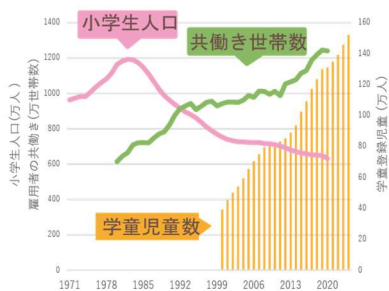


図1. 学童児童数・小学生人口・共働き世帯の変化(文2,3)

2.2 計画対象の現状

高知県香美市土佐山田町に位置する片地小学校は特認校制度を採用しており、大人数の教育環境が合わない子や不登校の子、大学生と交流したい子などが入学・転入する(図2)。学童に関しては、NPO法人に業務委託しており、小学校敷地内に学童施設が立地している。

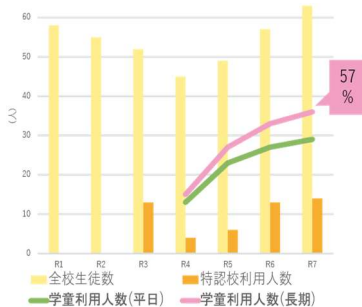


図2. 片地小学校・学童の推移(文4)

3. 提案

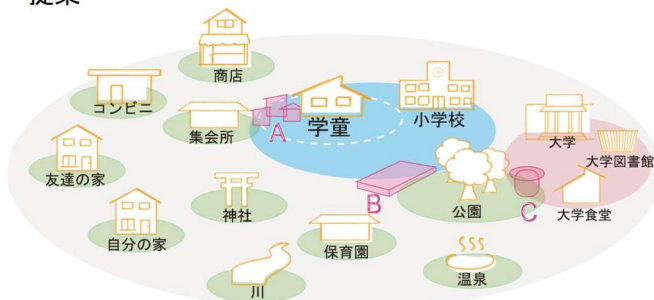


図3. コンセプト図

学童は第二の家として定義して、家と同じく、下校してからお出かけできる仕組みを大コンセプトに掲げる。

学童にGPS自転車を導入し、どこに行くか伝え、おでかけする。このような拠点型学童施設は、都市部では幾つかの先行事例が見られるが(文1)、地方都市や高知県では未だ整備されておらず、そこで香美市の実情に合わせた拠点型学童施設『おでかけ学童』を提案する(図3)。

4. 計画地

計画地は、高知県香美市土佐山田町宮ノ口の片地小学校内にある既存の学童(片地児童クラブ)とその周辺である。周囲には子供の居場所となりうる大学や公園といった地域資源が豊富にあるが、現在は境界がフェンスで区切られている。図6に示す計画敷地A~Cの境界をほどいて提案する。それぞれ、学童増改築による[おうち棟A]、小学校プールを活用した[おけいこ棟B]、休憩するための[ピクニック棟C]の3カ所である(図4,5)。



図4. 既存学童



図5. プール



図6. 配置図

5. 設計内容

5-A. 計画地 A [学童増改築 おうち棟]

「とんとん、ただいま」



図 7. おうち棟模型写真

既存学童は一つの空間(遊戯室)で過ごさなければならない。勉強・食事・遊びなどが分かれておらず、人数分の机がぎっしり詰められている。(図 8)そのため、ルールが複数あり、活動・居場所の選択肢が少ない。

課題を解決するため、外へほどく。学童→中庭・増築部分→地域へ多層的な境界を設計する。増築部分はこどもサイズの小さな建物を複数設計する。それぞれ天井の高さを高い・低いリズムで学童と外を繋ぐ。壁を平面的に斜めにする事でグラウンドと集会所と繋がる。間に壁を建てることでこどもが好きなたまり場ができる。増築部分を設計したことで、学童専用の中庭ができ、常に外へ出られる。(図 7~11)

追加機能

- ・ GPS 自転車置き場
- ・ カームダウン室(心を落ち着けるための空間)
- ・ 屋外和室
- ・ 黒板
- ・ 中庭

図 9. おうち棟追加機能

現状



図 8. 既存学童平面図

提案

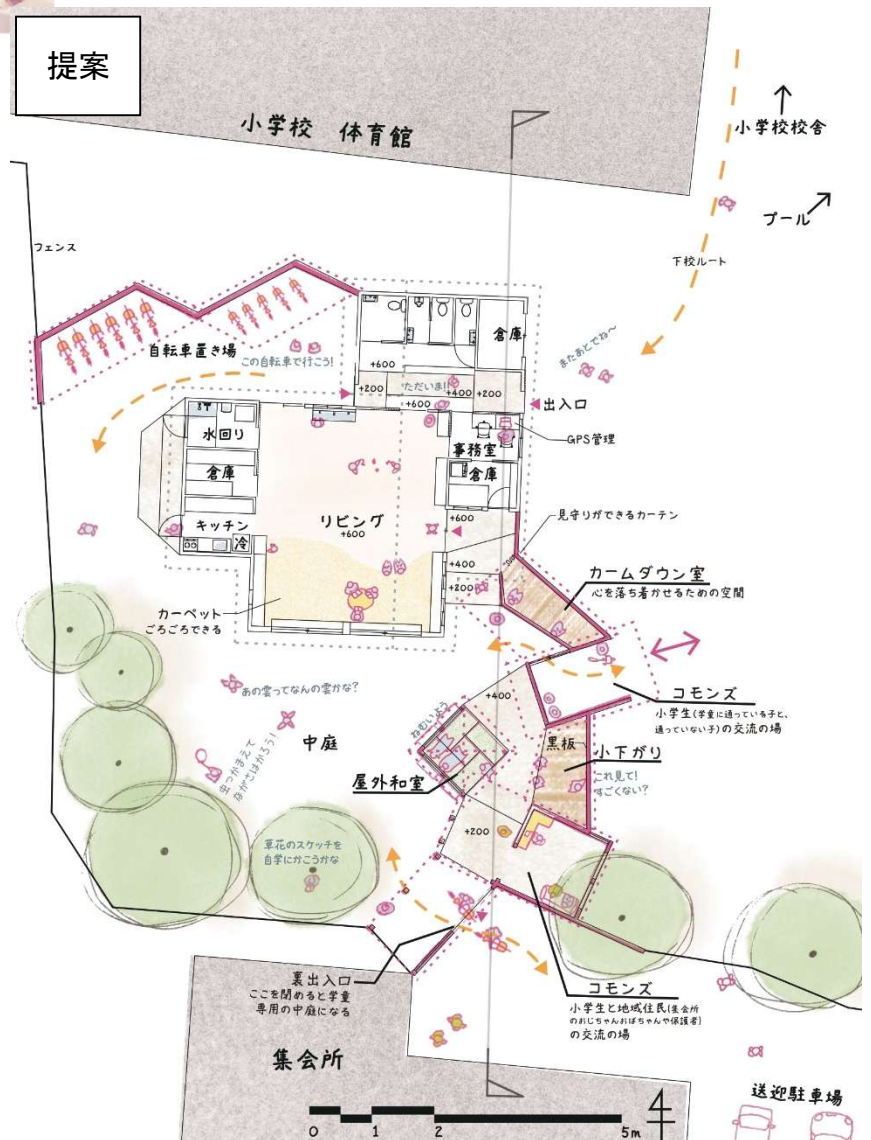


図 10. おうち棟平面図

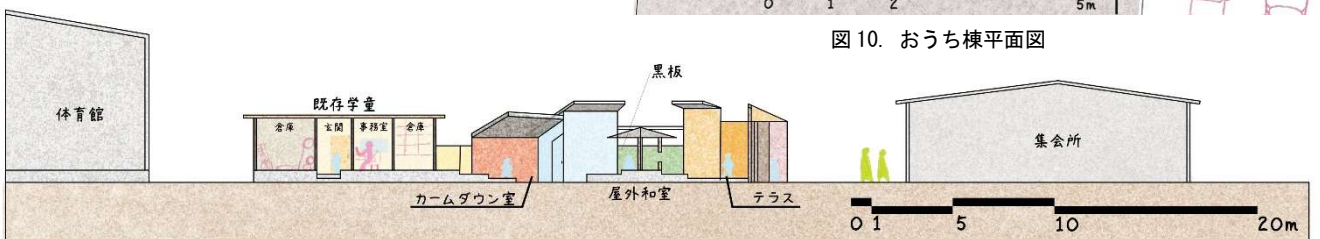


図 11. おうち棟断面図

5-B. 計画地B [プール増改築 おけいこ棟]
「空っぽプールのドタバタ・オンステージ！」



図 12. おけいこ棟模型写真 1

1年のうち、夏しか使われない小学校の屋外プールを劇場として見立てる。それにより、プールの中がステージになったり、プールサイドがランウェイのステージになったりする。ここでは、ダンスや演劇といったアクティブな活動ができる。プールを眺める客席として、幅広階段と遊歩道を設計する。遊歩道は木々を普段見られない角度で観察することができる。幅広階段の下部の空間に壁を建て、ダンス教室や楽器教室などの習い事部屋となる。地域住民や大学生が借りることもできる。(図 12~17)



図 13. おけいこ棟模型写真 2

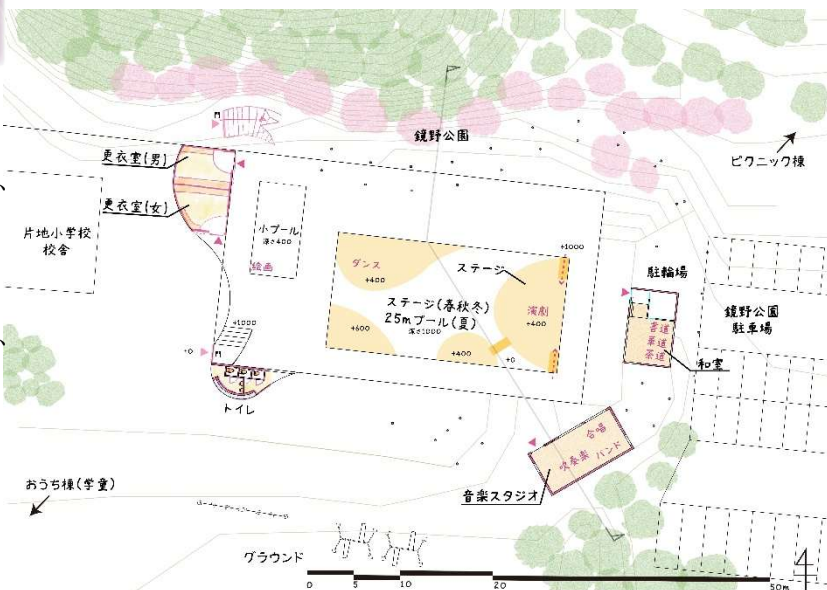


図 14. おけいこ棟平面図

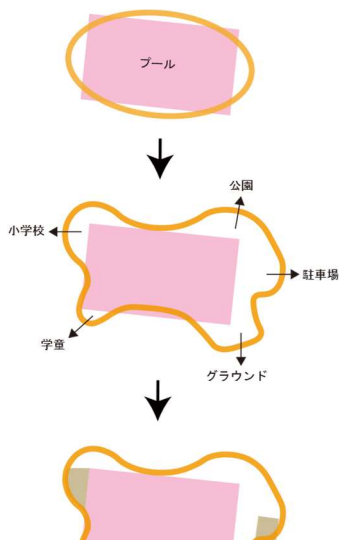


図 15. 平面的操作

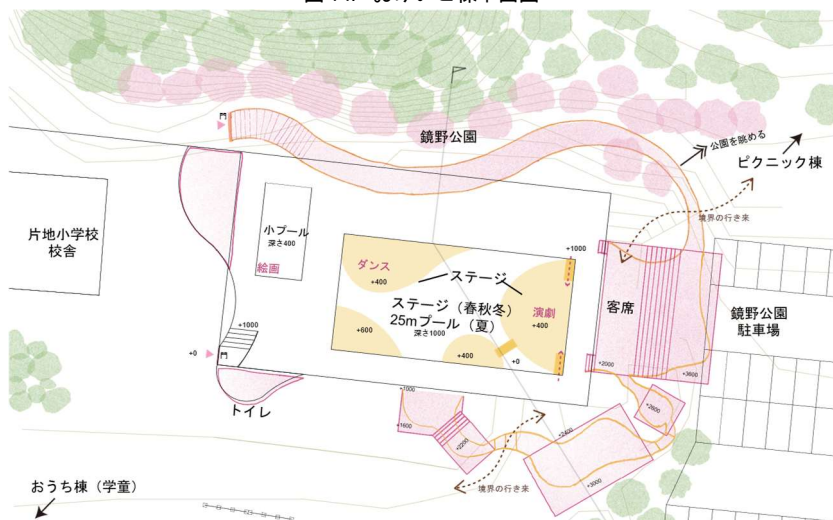


図 16. おけいこ棟屋根伏せ図

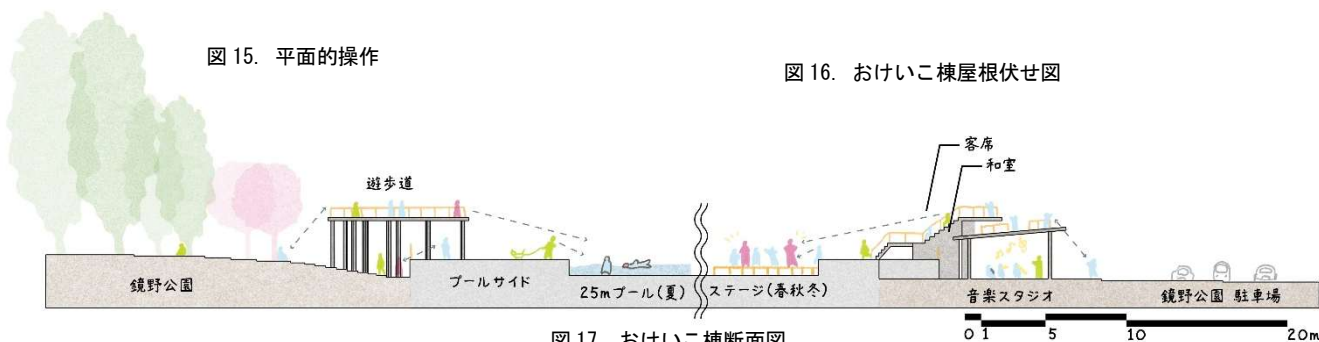


図 17. おけいこ棟断面図

5-C. 計画地C [新築 ピクニック棟] 「おひさまとかくれんぼ」

自由に過ごせるケアの場所であり、おひさまと過ごす時間は時間割のある小学校・大学とかけ離れたものである。小学生・大学生・地域住民それぞれのコミュニティを育む場となる。壁はなく、ルーバーと屋根で構成しており、太陽の動きによって明るさが変化する(図 18~22)。



図 18. ピクニック棟模型写真1



図 19. ピクニック棟模型写真2



図 20. ピクニック棟模型写真3

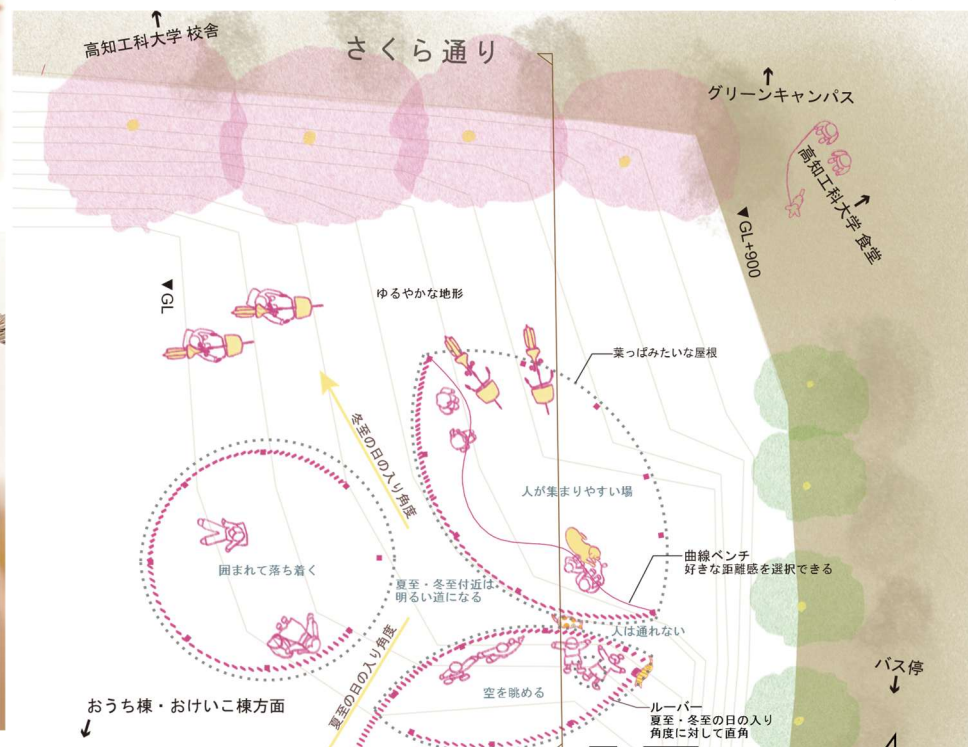


図 21. ピクニック棟平面図



図 22. ピクニック棟断面図

6.まとめ

学童は大人にとって「安全に預ける時間」となり、こどもが「自分で過ごす時間」としての豊かさが失われている。学童という閉鎖的なものを段階的にほぐすことで、ただ預けられるのではなく、真に第二の家となる。地域におでかけすることで、自分の居場所を探することができる。本来、放課後は小学校という社会から解放され、自由に自分らしく過ごせる時間なのではないだろうか。

この地域一体でこどもの成長を見守っていこう。

7.参考文献

- 1) 塚田由佳里・小伊藤亜紀子「民家等を利用した学童保育所にみる地域環境の関わりと遊びの自由性」大田市を事例として」日本建築学会計画系論文集 第74巻 第645号 2319-2328, 2024/07
- 2) 厚生労働省 共働き等世帯数の年次推移 <https://www.mhlw.go.jp/stf/wp/hakusyo/kousei/20/backdata/1-1-3.html>
- 3) こども家庭庁「令和6年 放課後児童健全育成事業（放課後児童クラブ）の実施状況」2024/12
- 4) 全国学童保育連絡協議会「学童保育情報（2024-2025）」全国学童保育連絡協議会 2025/02/20
- 5) 片地小学校 HP <https://sites.google.com/g.kochinet.ed.jp/331605%4E7%89%B9%E8%AA%8D%4E6%A0%A1>
- 6) 国土地理院基盤地図情報 <https://www.gsi.go.jp/kiban/>